

1. はじめに

デカルト（1596-1650）に先立つこと約八十年、論理学・修辞学・教育法などで数々の業績を残したペトルス・ラムス（1515-1572、フランス語名はピエール・ド・ラ・ラメー）がデカルトに及ぼした影響の可能性が語られるようになって久しい。中には反スコラの姿勢や学問における方法の重視、知識階級の言語であるラテン語ではなくフランス語で哲学を著したといった共通点から、ラムスをデカルトの先駆者と見る研究もある¹。はたしてデカルトは自らの哲学的方法を練る上で、ラムスの思想から実際に何らかの影響を受けたのだろうか。

結論を言えば、デカルト自身がラムスについて全く言及していない以上²、その直接の影響の有無を断言することはできない。しかし、デカルトは同様にスコラ哲学の影響についても言及してはいないが、デカルトが直接・間接にスコラ哲学から受けた影響については、ジルソンを始めとする諸家が指摘してきた³。たとえ哲学者自身が明言しないことでも、残された記述や諸背景等からそれを浮き彫りにすることが哲学史上の務めの一つであるなら、ラムスのデカルトへの影響を検討することも決して無駄な作業ではあるまい。はたして「ラムス—デカルトの軸」⁴というような繋がりが両者に認められるのかどうか、もしあるなら、それはどのような軸なのか。さらに、当時のいわば流行だったルスの術やシェンケリウスの記憶術などには、デカルトは直接言及している。これらはデカルトの方法形成にとって、どのような影響があったのか。これらの疑問点を、『規則論』を中心としたデカルトの初期認識論の形成と照らし合わせることで、デカルトの方法でこれまで看過されがちだった特徴の一つを浮き彫りにしようというのが本稿の狙いである。

2. ラムスとデカルトの方法の対比 —先行研究の問題点

ラムスとデカルトを対比する研究は、ネリ・ブリュイエールが先鞭をつけている⁵。彼はラムスの弁証法的方法の影響をデカルトのとりわけ初期思想に認め、その表れを『規則論』が述べる方法と数学 *mathesis* の二つの側面から分析した。ラムスとデカルト双方に共通してみられる事項として、方法の面では、発明する *invenire*、判断する、直観 *intuitus* や精神の眼で見るといった鍵となる行為に光を当て、数学については *mathesis* という語彙の共通点以上に、諸学問の中でも際立つその明証性のために、方法の形成に資する規範的な学問と見なし、両者とも数学に特権的な地位を認めていた点を指摘した。しかし、この点に関するラムスとデカルトの共通点はあくまで限定的であろう。というのは、ともに数学を規範として方法を樹立したにせよ、ラムスの方法の目的は、弁証法的な推論と学問の教授（さらには宗教的考察）にあったのに対し、デカルトの方法はあくまで真理探究を目的としているからである。この意味で、ブリュイエール自身が結論するように、最終的に理性と神学の一致を目指す弁証法的方法と、その形成に寄与する学問としての普遍数学 *mathesis universalis* と発見的な論理学の同一視、そ

デカルトのテキストの引用は *Œuvres de Descartes*, Charles Adam et Paul Tannery [éd.], Paris, Vrin/CNRS, 1964-1974; 1996 (AT と略称、続いて巻数、ページ数、行数を記載) に拠る。

¹ 例えば Charles Waddington, *Ramus (Pierre de la Ramée) : sa vie, ses écrits, ses opinions*, Paris, Ch. Meyrueis, 1855, p. 10 & p. 387 ; Émile Saisset, *Précurseurs et disciples de Descartes*, Paris, Didier, chap. II, 1862, とりわけ pp. 73-74 ; André Robinet, *Aux sources de l'esprit cartésien*, Paris, Vrin, 1996, I, chap. IV.

² ラムスによって設立され、その名を冠されたコレージュ・ド・フランスでの当時の数学講座「ラムス講座 la chaire de Ramus」についてデカルトは二回言及しているが（1634年4月付メルセンヌ宛書簡、AT I, 288 ; 1648年12月18日付某宛書簡、AT V, 257, 6）、ラムス本人や、ましてやラムスの思想についてではない。

³ Étienne Gilson, *Études sur le rôle de la pensée médiévale dans la formation du système cartésien*, Paris, Vrin, 1930 ; Jean-Luc Marion, *Sur la théologie blanche de Descartes*, Paris, Puf, 1981 ; Roger Ariew, *Descartes and the Last Scholastics*, Ithaca ; London, Cornell Univ. Press, 1999, etc.

⁴ A. Robinet, *op. cit.*, 副題。

⁵ Nelly Bruyère, *Méthode et dialectique dans l'œuvre de La Ramée : renaissance et âge classique*, Paris, Vrin, 1984.

してライプニッツ自身のラムスの方法への言及⁶などから見て、ラムスの影響をより多く受けたのは、デカルトよりもおそらくライプニッツと言えるだろう⁷。

アンドレ・ロビネはブリュイエールの分析をさらに推し進めた。ラムスとデカルトに共通してみられる発明や判断という方法上の行為だけでなく、その中で重要な役割を担う直観、自然の光、単純本性、普遍数学 *mathesis universalis* といった内容についても、『規則論』に見られ得るラムスの思想の痕跡と発展をロビネは検討している。ブリュイエールとロビネは共に『規則論』の方法に見られる弁証法的側面について言及し、デカルトにおいて数学の実践は、弁証法的な方法を確認するためと見ている。そのような「数学的弁証法」や「デカルト的弁証法」⁸ というようなものを、実際にデカルトの思想や『規則論』に認めることはできるのだろうか。この点について忘れてはならないのは、デカルトが弁証法と論理学について常に否定的な点である⁹。『規則論』の論述の仕方に、たとえある種の「進展」や「推論」があるにせよ、それは教授法や証明方法の発見と確立を論理的に目指したラムスの推論とは全く異なり、精神が独力で真理を発見するための方法の論述が、順を追って演繹的に進展しているにすぎないからである。

テオ・ファーベークはロビネの議論を取り上げ、若きデカルトのオランダ駐留時代の友人であるベークマン（ライデン大学の数学教授で、ラムスの数学・物理学・弁証法についての講義をしたスネリウス[またはスネル、屈折の法則の発見で知られるヴィレブロルト・スネルの父]の生徒だった）を経由して、デカルトがラムスの思想に触れた可能性を認めつつも、確かな裏付けが無い以上、類似の用語を使ったという理由でデカルトをラムス主義の流れに位置づけることは有益ではないと指摘した¹⁰。ファーベークが言うように、当時のオランダでは、ドイツ経由で流入したラムス（プロテスタントゆえ、まずドイツやスイスで受け入れられた）の思想が盛んだった（そしてスネリウスがその中心におり、ベークマンは彼の生徒として間違いなくその流れに身を置いていた）とはいえ、またデカルトのオランダ滞在が長きに及んだとはいえ、ラムス主義の潮流にデカルトが身を浸したという確たる痕跡は現在のところ見つかっていない。

しかしながら、ラムスが王立教授団（のちのコレージュ・ド・フランス）の数学講座に名を残すほど数学を重視したこと、そしてラムスもデカルトも、数学が方法を形成するための重要な鍛錬になると考えたことは確かであろう。ド・ビュゾン¹¹は、ラムスにとっての数学の効用を検討し、デカルトとの相違や影響の可能性を明らかにするに際し、ラムスによるエウクレイデス『原論』註釈書の序文に記された以下の部分を引用している。「これ以上に結ばれ、繋ぎ合わされ、確固としたものは何も無く、強固な基礎のように原理が確立されれば、帰結の証明は確証される。続いて、明白かつ明証的に結論されたことから、他のことも結合し、そして学問のすべての記述は互いに繋がり、結びつくのである」¹²。このような基礎としての原理や、証明の連鎖的な帰結という考えには、確かにデカルトとの一定の共通点が認められよう。しかしド・ビュゾンはこの点には注目せず、ラムスが数学 *mathesis* の語で指し示すものの検討にすぐ入る。その内容には立ち入らないが、*mathesis (universalis)* という共通の語の使用が、ラムスとデカルトとの繋がりを示すわけではないと結論し（尤もな結論であろう）、それをさらに裏付けるため、ラムスが（デカルトとは異なり）数学を弁証法のためにどう使ったかの分析に入る。

ここで注意しなくてはならないのは、ラムスとデカルトの関係可能性を考える上で、*mathesis (universalis)*の指示内容や、概念の歴史的な脈にあまり引きずられ過ぎないことである。第一に、両哲学者にとって数学研究はあくまで自身の方法を練磨するためのものであり、第二に、デカルトは普遍数学 *mathesis universalis* なる語をコーパスで「第四規則」後半でしか使っていないからである。この後半部分は、ライプニッツが入手した所謂ハノー

⁶ Leibniz, *De arte combinatoria*, éd. Gerhardt (GP) IV, p. 51 & p. 55; p. ; *Nouveaux essais sur l'entendement humain*, GP V, livre IV, chap. I, §2, p. 338; chap. II, §1, p. 346; chap. XVII, §4, p. 428 & §8, p. 436 ; *Textes inédits*, éd. Grua, p. 650, etc.

⁷ N. Bruyère, *op. cit.*, pp. 194-201 & pp. 353-394.

⁸ A. Robinet, *op. cit.*, p. 151 ; p. 263 ; p. 277

⁹ 「第二規則」 AT X, 365, 6-9 ; 「第十規則」 AT X, 405, 21-406, 26.

¹⁰ Theo Verbeek, « Notes on Ramism in the Netherlands », in *The Influence of Petrus Ramus: Studies in Sixteenth and Seventeenth Century Philosophy and Science*, Basel, Schwabe, 2001, p. 47-49.

¹¹ Frédéric de Buzon, « Mathématiques et dialectique : Descartes ramiste ? », in *Les Études philosophiques*, 2005/4 (n° 75), p. 455-467, repris dans *La science cartésienne et son objet : Mathesis et phénomène*, Paris, Honoré champion, 2013, pp. 34-58.

¹² Petrus Ramus, *Euclides*, Paris, Louis Grandin, 1545 ; Paris, Thomas Richard, 1549, Préface, f.1v. - 2r.

ファー手稿では、『規則論』全体の最後に付録として置かれ、また近年ケンブリッジ大学で新たに発見された手稿によれば完全に欠如している¹³。デカルトがほぼ全く使わなかった、あるいは使用を放棄した語の出自や概念の背景を辿るより（それは別の議論になろう¹⁴）、本稿では、デカルトがその語の使用によって目指したものを考察したい。それは「順序と尺度に関する学問」（AT X, 378, 5-6）とデカルト自身が明言し、その内容は「第六規則」以降、特に「第十四規則」が詳述しており、これを検討するほうが、我々の疑問点にとって有益と思われる。その前に、当時のデカルトが真理探究の方法を形成にするにあたり、参照した可能性のあるラムスの方法、さらにルルスの術と記憶術について検討しよう。

3. 中項による学知の鎖 —ラムスの場合

ラムスによるエウクレイデス『原論』註釈書の序文には、先に引用した部分の直前に、ド・ビュゾンが引用も言及もしていない以下のような記述がある。「初めのもの中項 *media* によって、中項はあとのものによって、そしてすべては相互に、ある種のホメロスの金の鎖 *catena* のように繋がれ、結合している」。ラムスは、エウクレイデスの定義から命題への一連の流れに「金の鎖」のような結合を見た。そしてその鎖は「中項」によって繋がれている。もしラムスとデカルトの思想にある種の共通点があり、前者から後者への影響の可能性を考えるなら、この言明が表す、中項によって諸項を結合して連鎖を成すという認識の方法に、我々はそれを見るであろう。奇しくも両者は、この方法を数学という同じ源流から得ている。そして『規則論』が冒頭から繰り返し強調するのは、数学研究そのものでも、ましてや普遍数学でもなく、ラムスによる序文同様に、すべての学知を結合することの重要性なのである。ラムスとデカルトがそれぞれに考える連鎖は重なり合うところがあるのだろうか。

方法に対する「金の鎖」という比喻を、ラムスは『弁証法』第二巻でも使っている。まず、方法を自然からのものと賢明さからのものとに分類し、「自然からの方法とは、全くそして絶対的に最も明証的で最も周知のことが冒頭に置かれる方法である。…自然に最も明証的なものが、教理の順序と供述においては先行しなくてはならない」¹⁵。自然な方法を重視し、自然な明証性を学知において最優先するという考え方で、ラムスとデカルトは共通点があると言えよう¹⁶。

そして学知の自然性に対する両哲学者の信頼は、ともに学知が種子として我々の精神に植え付けられているという、学知の生得（本有）性を根拠にしている¹⁷。ラムスによれば、学知の種子は生まれながらに精神に存在しているので、それは草原の植物と同じく、自然に芽を出す。「草原で草は自然に生まれる。しかも場所によってはより多く、より実り豊かに。このように人間の精神には、自然によって技芸の種子が植え付けられていると考えねばならない、しかも人によってはより豊かに」¹⁸。ラムスは、自然が植え付けた種子や、その果実である自然な方法を、自然であると同時に技芸に属するものとも見ている。なぜなら、それらは「技芸と教理の伝統において保たれ、判断である限りにおいて、必要な言明と正しく結論された三段論法にこたえる」¹⁹、すなわち、論理学の必要を満たす技法を訓練するために精神に備えられた自然な手段だからである。論理学や弁証法において必要な技芸こそが、ラムスにとってもっとも自然な学知や方法であり、学知や方法は、我々の精神に生得的で自然なものほど、我々が作り上げた学問や技芸に最も自然に当てはまる。結果として、我々にとって自然なものは同時に技芸的なものでもあった。

¹³ 2011年にケンブリッジ大学で Richard Serjeantson によって発見された草稿で、出版が待たれている。「第四規則」後半を欠くだけでなく、全体が AT 版『規則論』の約四割の長さしかない。これが著されたのは AT 版のものより先か後か、議論が分かれる（cf. *Œuvres complètes*, I, éd. J.-M. Beyssade & D. Kambouchner, Gallimard, 2016, pp. 299-301）。

¹⁴ この点は諸研究があり、近年は David Rabouin による広範なものがある（*Mathesis universalis : l'idée de «mathématique universelle» d'Aristote à Descartes*, Paris, Puf, 2009）。

¹⁵ Pierre de la Ramée, *Dialectique*, Paris, A. Wechel, 1555, p. 120.

¹⁶ デカルトが真理認識において自然性を重視したことは、例えば『方法序説』AT VI, 12, 25-13, 1 ; 63, 31-64, 5 ; 77, 24-30, etc., 自然の光の無謬性への全面的な信頼など、随所に表されている。

¹⁷ 『規則論』における学知の生得性については「第四規則」AT X, 373,3-24; 376, 12-20 参照。

¹⁸ P. Ramus, *P. Rami Scholarum mathematicarum libri unus et triginta*, Bâle, Eusebius, 1569, p. 10.

¹⁹ P. Ramus, *Dialectique*, p. 120.

ラムスにとって、そのように自然と同一視される技芸の様々な方法は切れ目なく結びついているので、一つだけを省いたり除外したりすることはできない。「技芸のこの方法はある種の長い金の鎖のように思われる…そこにおける環は相互に依存しあうまでに達し、すべては一緒に組み合わせられているので、すべての順序と連続を断ち切らずには何ものをも省くことができない」²⁰。このように連鎖を成す「技芸の方法」の着想をラムスは数学研究から得ており、自ら序論と註釈を施したエウクレイデス『原論』は、その源の一つであろう。ところが『原論』に対するラムスの態度は、その註釈時とその後では同じではない。『原論』註釈に取り組んでいた頃、ラムスはおそらく数学を何らかの形で反スコラの学問改革に取り入れようとしていた。しかしその考えが確固たるものに纏まらないまま、やがて王立教授団の雄弁術と哲学の教授になったラムスは、修辞学や弁証法についての多くの著作を発表するうち、エウクレイデスは公準・公理や命題を同語反復的に提示するだけで、学問にとって必要なことを省いていると痛烈に批判した²¹。すべての学問が普遍的かつ方法的であるために必要なものは、論理とそれに基づいた証明であり、数学も例外ではない。数学は論理学の法則によって確立されなければならない、命題は真理を単に述べるだけではなく、証明されなくてはならない²²。後年のラムスにとっては、若年時に打ち込んだ数学研究は、論理学と弁証法に資する学問の一つなのである。

さらに論理学者ラムスは、算術と幾何学を峻別した点で、これら二教科の統一を目論んだ青年デカルトとは決定的に異なっている。ラムスによればこの二つの学問のうち、順序として先に論ずるべきは算術で、幾何学はその後に来るものだが、エウクレイデスは守るべき順序を転倒させたうえ、この二つを混同した。「算術は算術的に、幾何学は幾何学的に」教えられるべきと主張する王立学校教授ラムスは、この主張の典拠として、以前は公然と批判していたアリストテレスの『分析論後書』中の「ある類の論証は他の類に適用できない」という議論に頼るのである²³

ラムスは「学知の連鎖」の考えをエウクレイデスの数学から得ておきながら、これを数学そのものではなく、アリストテレスを援用して弁証法や論理学への適用を目論んだ。そしてラムスの言う連鎖は、アリストテレス論理学に倣って、一般から特殊へと至る順序を成すものだった。対して成年デカルトは特殊から一般を導き出す方法を取るが²⁴、若年時の『規則論』においては、ラムスと同じく一般から特殊の順序に沿って、さらには公準のごとく冒頭に置かれた規則から、順を追って演繹的に導き出される事柄に沿って記述が進む。これは『規則論』がそれまでのデカルトの数学研究を反映して、始めに想定した定義や公準、公理から、確実に引き出すことのできる個別の命題へと進む数学の記述様式に倣って論述されたことを如実に示していると言えよう。

4. 連鎖と記憶術

パオロ・ロッシやフランセス・イエイツは、ラムスやデカルトの方法を、ライムンドゥス・ルスの影響（またはそれへの反発）の下にあった十六・十七世紀の結合術や記憶術の流れに位置づけて考察している²⁵。この視点で見ると、ラムスとデカルトが時を隔てて交錯している可能性が浮かび上がる。ただ、前述の通りデカルトはラムスに言及していないので、あくまで間接的な交錯の可能性である。

その可能性の一つは、若きデカルトが大いに触発されたオランダの友人ベークマンであり、ルルス（とその著作を註釈したアグリッパ）に対する二人の態度である。若きデカルトがある宿でルルス主義者と話し合った結果、ルルスの術は口先だけのもので、真理を語るよりは無知な人々の賞賛を得るのを目的にしているのではないかと

²⁰ *Ibid.*, p. 122.

²¹ P. Ramus, *Collectanea, praefationes, epistolae, orationes*, Paris, Dionysius Vallensis, 1577, pp. 173-174.

²² *Ibid.*, p. 176. Cf. Isabelle Pantin, « Ramus et l'enseignement des mathématiques », in *Ramus et l'Université*, Cahier V.L. Saulnier, 21, éd. Rue d'Ulm/ENS, 2004, pp. 71-86.

²³ *Ibid.*, p. 171. Cf. アリストテレス『分析論後書』第一巻、第七章 75a39-75b1; 75b14-17; 第九章 76a22-25.

²⁴ 「第二答弁」AT VII, 140, 28-141, 2. 但し「第六規則」は、普遍が存在するためには個別に依存しているという「普遍の相対性」についても指摘している (AT X, 382, 21-24).

²⁵ Paolo Rossi, *Clavis Universalis: arti della memoria e logica combinatoria da Lullo a Leibniz*, Milano ; Napoli, R. Ricciardi, 1960、パオロ・ロッシ『普遍の鍵』、国書刊行会、1983年; Frances Yates, *The Art of Memory*, New York, Routledge, 1966; 1999、フランセス・イエイツ『記憶術』、水声社 1993年。

の印象を持ち、アグリッパの註釈書を読んで調べてほしいとベークマンに依頼した。ベークマンはそれに応え、ルルスの術は多くの「場」に応じて細分化された知識を、言葉によって多様に結合しているだけで、文字に囚われて中身のないものだと述べ、デカルトに同意した²⁶。この点についてベークマンはさらにルルスの術をラムスの論理学と対比し、ルルスの術は個別に精通した学問を教えるには良いが、論理学の代わりにはならない、と自身の日記に書き留めている²⁷。ベークマンはライデン大学でラムス主義者のスネリウスに学んで以降、自らの推論の進め方のみならず、機械学の樹立にあたってはラムスの方法の影響を大きく受けており、日記の随所でラムスに言及している²⁸。ベークマンにとって論理学は、ラムスの論理学に代表されるものだった。

それは具体的にどういう意味を持っていたのか。ベークマンは日記の巻頭に、数学、自然学から倫理学までも含む全学問の結合を謳い、以下のように記した。「なぜ学術 *ars* を相互間で従属させないのか、なぜ学問を一般的にしないのか… すべての学術の知 *scientia* は一般的なのだから、論理学のように」²⁹。ベークマンにとってすべての学問が結合された一般的な学知の体系は、論理学によって代表されるものだった。デカルトと同じように学知に対するルルスの術の効用を否定し、同じように全学問の結合を構想しても、論理学をルルスの術と同断に批判したデカルトとは異なり、ベークマンはこれらの点を論理学をもって考察したのである。

二つめの間接的な接点の可能性は、シェンケリウス（シェンケル）である。ヴァンサン・キャローによれば、デカルトが前述の宿で出会い、ベークマンに問い合わせたルルス主義者の「術」は、当時流行っていたシェンケリウスのもも含まれていた³⁰。そしてデカルトは自身の『思索私記』で、シェンケリウスの記憶術を「ペてん師のもの」と批判し、事物の全原因を唯一の原因へと収斂させるための、相互に依存関係にあるイメージによって正しい因果性の秩序を形作ることに、学知の「神秘のすべての鍵がある」と記した（AT X, 230, 3-25）。若きデカルトにとって学知の結合は、イメージの因果関係を媒介として行われる。デカルトはこれこそが「真の記憶術だ」と述べるが、イエイツによれば興味深いことに、このような因果性に基づいたイメージによるデカルトの記憶法は、例えばベーコンの主張などと比べても、神秘主義者たちの方法により近く、神秘的な記憶術をいわば合理化したものと言う。さらにイエイツは、デカルトがこのような記憶法を考えるにあたって、シェンケリウスの弟子ヨハンネス・パエップの書を参照した可能性も指摘している³¹。そしてパエップには、例えば以下のような表現が見られる。「相互に連結している、自然な、または人工的な連鎖 *catena* を我々は形成する… 中間物 *media*、または中間の *medius* イメージを置くことで、先行するものとそれに続くものの、イメージの、または場の知識を導入する」³²。イメージを媒介として知識の連鎖を形作ろうというパエップの記憶術は、イエイツが見たように、シェンケリウスを批判したデカルトの「真の記憶術」とも、のちに見るように、デカルト自身が唱える中項 *medium* を媒介にした知識の連鎖の考えとも近いものがあると言えよう。

しかし、『思索私記』を書いた時期にデカルトが考えていた具体的な知識の連鎖とは、ルルスの術でも記憶術でも、学問一般を可能にする論理学でもなく、量に関する全問題を解くことができる「まったく新しい学問」³³である算術と幾何学の結合、のちの解析幾何だった。これは、神秘思想が考えるような隠された質的知識の探究や、オカルト的変換の手続きを必要とするものではなく、あくまで量に関わる認識を合理的な方法で結び付ければ形成できるものである。用語や表現の類似性、当時の流行などの条件を鑑みて、デカルトがラムスやシェンケリウスの記述から想を得たことは充分あり得るだろう。しかし、シェンケリウスの記憶術に抗して、若きデカルトはイメージによって因果性を辿る道を思いついたものの、認識相互を媒介して結び、一つの連鎖を成すものは、結

²⁶ 1619年4月29日付デカルトからベークマン宛書簡、AT X, 164, 15-165, 23; 1619年5月6日付ベークマンからデカルト宛書簡、AT X, 167, 5-168, 17.

²⁷ *Journal tenu par Isaac Beeckman*, I, La Haye, Martinus Nijhoff, 1939, pp. 294-295, cité dans AT X, 63-65.

²⁸ ラムスのベークマンへの影響については以下を参照。Klaas van Berkel, *Isaac Beeckman on Matter and Motion : Mechanical philosophy in the making*, Baltimore, The John Hopkins Univ. Press, 2013, pp. 156-163.

²⁹ Beeckman, *Journal*, I, p. 1.

³⁰ *Étude du bon sens*, éd. V. Carraud & G. Olivo, Paris, Puf, 2013, p. 151, n. 49

³¹ F. Yates, *op. cit.*, p. 374.

³² *Crisis, iani phaosphori, in quo Schenkelius illustratur*, Lyons, 1619, pp. 16-17, cité dans Geneviève Rodis-Lewis, *L'œuvre de Descartes*, Paris, Vrin, 1970, p. 464, n. 41.

³³ 1619年3月26日付ベークマン宛書簡、AT X, 156, 7-157, 3.

局デカルトにとっては記憶したイメージではなく、また三段論法に代表されるような論理学や、他者への説明や教育を主眼に置いた弁証法でもなかった。一切の誤りから免れ、ひと繋がり真理を確実に手にするには、デカルトには若年時からもっとも親しんだ数学的方法より他なかった。

5. デカルトの方法における中項

では知識の連鎖という観点で考えたとき、そのための方法をデカルトは数学研究からどのように抽出したのだろうか。より具体的には、ラムスがエウクレイデス『原論』について述べたような、あるいはシェンケリウスやパエップが記憶術で述べたような、諸項を中項によって結合して連鎖を成すという着想を、デカルトはどのようにして得たのだろうか。

『方法序説』第二部では有名な四つの規則が語られるが、その中で「枚挙と見直し」を説く第四の規則は、ラテン語訳のテキスト（『序説』の十年後の1647年に出版）には、フランス語原本にあった「至る所 *partout*」(AT VI, 19, 3)の訳語が無く、代わりに「中項 *media* を探し、困難な部分を概観する」という記述がある³⁴。この考えは『規則論』では、第六・第七・第十一規則など随所に見られ、わけでも第十七規則 (AT X, 459, 5-461, 10) の内容をそのまま要約したものと見ることができる。

『序説』が述べる方法の発見時期は、『規則論』の構想と執筆の時期と重なっているため、この箇所の中項の語を持ち出すことに不思議は無い。なぜ『序説』ラテン語訳だけが中項の語を記し、フランス語原本では省かれたのかは不明だが、『規則論』の圧縮版とも言える『序説』の方法を述べた箇所の、少なくともラテン語訳には、方法の第四の規則に中項の探究を入れなおしたこと、そしてこれをデカルトの晩年と言える時期の出版に際して行ったことは、デカルトの方法に占める中項の重要性と、それを哲学者が長らく忘れてはいなかったことを示すに足るであろう。

この点に関し、デカルトの方法について註釈を施したポワソン神父の著作中には、以下のような注目すべき記述がある³⁵。「これらの規則のうち、実践がもっとも難しいのは最後のもの（諸問題を関連づけて比較すること）である。なぜなら…学校で中項 *Medium* と呼ばれる項 *Moyen* を必要とし、それを見つけるのは容易ではないからである」³⁶。「学校で中項 *Medium* と呼ばれる項」とは、論理学の初項と末項（または両端項。三段論法ならば大前提と小前提）を共通に含み、両者を媒介するために用いられる中項で、これはアリストテレスが『分析論前書・後書』で詳述している、論理学の核とも言える概念である³⁷。ところがデカルトは、三段論法を含む論理学は真理発見のためには役立たないと一貫して批判しているため³⁸、論理学からこの語を借用した可能性はきわめて低い。ではデカルトは、諸問題を関連づけて比較するための中項という考えをどこから取り入れたのだろうか。

6. 中項による認識結合法の形成 —デカルトの場合

若きデカルトがその最初期の研究で *medium* という語を用いたのは、まず音楽論においてだった。第一作の『音

³⁴ « *tum in quærendis mediis, tum in difficultatum partibus percurrendis* », AT VI, 550, 24-25.

³⁵ この部分を AT 版では、『規則論』の AT 版（写本）とは異なる原本（あるいはケンブリッジ大学版か？）に関わる説明としているが、E. Martineau はこれを失われた『良識の研究』（1623年までに執筆）についての説明としている（*Étude du bon sens*, éd. V. Carraud & G. Olivo, p. 153, n. 58）

³⁶ Nicolas Poisson, *Commentaire ou Remarques sur la Méthode de René Descartes*, Vendôme, 1670, p.76 ; AT X, 476.

³⁷ 25b32-38 を始めとして、中項に関する説明は『分析論前書・後書』の随所にある。とりわけ知識と論証の構造について解説した『後書』第一巻は、そのまま中項（または無中項）の機能に関する解説書でもある。アリストテレスは中項による推論と論証の一般的な方法を説きつつ、その方法は常に数学を視野に入れている。例えば中項によって結ばれた事柄は、数学においては理性の働きで見ることができるが、議論（ロゴス）においては見失われることがあると指摘している（『後書』77b28-33）。これはデカルトが中項について学んだ際、誤りを避けるため、以後これを論理学ではなく、数学でのみ考えることを決意させた契機の一つとなった可能性もあろう。

³⁸ 例えば第二規則、AT X, 363, 21-365, 13 ; 第十規則、AT X, 405, 21-406, 26 ; 第十四規則、AT X, 439, 24-440, 5 ; 『方法序説』第二部、AT VI, 17, 11-26.

楽提要』で何度か登場するこの語はいずれも、音から音への急激な移行を避けて円滑に繋げるため、算術的に導き出される中間の音として言及されている³⁹。極端を避け、釣り合い *proportio* を追究したデカルトの音楽論にとって⁴⁰、聴覚の快と「数学的な適合性」⁴¹という二つの観点から、中間 *medium* は重要な役割を担っていた。

次に *medium* の語が現れるのは数学に関するメモの中だった。「すべての問題において、両極の二項を明示的もしくは暗示的に結び付ける何らかの中間項 *aliquod medium* が見つけられねばならない」⁴²。引き続いて、両極の二項の例として円と放物線が挙げられ、中間項として円錐が挙げられていることから、ここで数学的問題が念頭に置かれていることがわかる。引き続く段落には共通項 *communis mensura* という語が現れ、「時間を測るため、時計の形式で用いられる空間。二つの種類をそれにおいて結合させる同様のもの」⁴³という記述がある。時間と空間という異なる二項を時計という共通項を通じて関係づける作業には、非連続量である数と連続量である空間を連関させることで、連続量・非連続量のどちらにも置き換えて表現可能な「まったく新しい学問」⁴⁴すなわち代数幾何学を樹立しようという、若きデカルトの最初の試みが明確に現れている。そのために、諸項を通約して結ぶ中間項あるいは共通項の役割が極めて重要となるが、数学的に考えられたその概念は「学校で中項と呼ばれる項」である論理学の中項と同じではない。そしてこのメモこそ、『規則論』に至って一つの完成を見る「中項による認識の結合方法」の原型を示しているのである。

もしデカルトがこの着想を数学から得たならば、出身校のラ・フレーシュ学院で用いられ、デカルトも参照していたと考えられる、クラヴィウスによるエウクレイデス『原論』の註釈書からの可能性がある⁴⁵。学院を運営したイエズス会の設立者ロヨラはパリ大学に在籍中、神学のみならず数学を含む教養科目の講義も受けており、おそらくはその経験を活かして、当時は大学でのみ教えられていた数学をイエズス会による学校教育にも取り入れることにした。そしてイエズス会の「学事規定」で数学教育を定める任に就いたのがクラヴィウスなのである。

⁴⁶『原論』註釈書の第一部第五巻は比例 *proportionalitas* について解説しており、その最終部分は算術比例、幾何比例、音楽あるいは調和比例についての詳述に当てられ (p. 181-212)、とりわけ規則 7 は中項 *medium* を用いた連続比例の発見法について註釈している (p. 192)。数学において、事物間の「多様な関係あるいは比例 *proportions*」(AT VI, 20, 3-4) の考察に注力した若きデカルトは、当然ながらエウクレイデス『原論』に通暁していた。そしてデカルトが参照した『原論』は、クラヴィウスの註釈書だけではなく、様々な共通点を考え併せると、前述したラムスの註釈書も含まれるかもしれない。

デカルトがその考察に注力した比例 *proportio* とは、ギリシア語のアナログイア *ἀναλογία* に由来する語であり、エウクレイデス『原論』第五巻は比例 *ἀναλογία* について詳述している。その定義 3 によれば、比 *λόγος* (*ratio*) とは同じ類の二つの大きさに関するある種の関係であり、定義 6 によれば、同じ比をもつ複数の大きさは比例している *ἀνάλογον* (*proportionalis*) と言われる。すなわち比例 *ἀναλογία* (*proportio*) とは、複数の比が量的に等しい関係 (例えば $a/b = c/d$ や $a/x = x/b$) にあることを指す。

このようなアナログイアによる認識について、デカルトは「第十四規則」で説明している。曰く、既知のものから未知のものを導き出すには、共通観念 *idea communis* を前者から後者へ移すという単純な比較 *comparatio* が必要である。例として挙げられた $A = B, B = C, \therefore A = C$ の比較 (この場合、*B* が中項すなわち共通観念) によって得られる知識は、エウクレイデスが述べるアナログイアの定義をそのまま表している。このように諸項の関係を、それらを通約する中項あるいは共通の尺度 *communis mensura* を用いて測り、比例 *proportio* の相等性に還元してその関係を明らかにする認識方法が比較 *comparatio* (*com*:〜と、*par*:等しい・類似の) あるいは類比 *analogia* (AT X,

³⁹ 『音楽提要』、AT X, 106, 5 ; 116, 3 ; 117, 22 ; 119, 3.

⁴⁰ *Ibid.*, AT X, 91, 5-9 ; 92, 12-16, etc.

⁴¹ 1619 年 1 月 24 日バークマン宛書簡、AT X, 153, 4.

⁴² 『思索私記』AT X, 229, 16-18. Michel Serfati は、この「哲学的本質」に関わる点をデカルトの思索の「定数の一つ *une des constantes*」と見ている (*De la méthode*, Besançon, 2e éd., 2011, p. 50).

⁴³ 『思索私記』AT X, 229, 22-23 ; 229, 27-230, 1.

⁴⁴ 1619 年 3 月 26 日付バークマン宛書簡: « ...scientiam penitus novam... », AT X, 156, 8.

⁴⁵ Clavius, *Christophori Clavii Bambergensis e Societate Iesu Operum mathematicorum*, Mainz, Reinhard Eltz, 1612.

⁴⁶ Geneviève Rodis-Lewis, *Descartes*, Paris, Calmann-Lévy, 1995, p. 25 ; p. 318, n. 2 ; « Descartes et les mathématiques au collège », in N. Grimaldi & J.-L. Marion (éd.), *Le Discours et sa méthode*, Paris, Puf, 1987, pp. 187-211.

441, 20) なのである。クラヴィウスの註釈書からにせよ、ラムスの註釈書からにせよ、このようなデカルトの類比による認識方法は、(比例) 中項を介した諸項の連結法と共に、エウクレイデスの比例概念に則ったものであることは明らかであろう。

7. 結びに代えて ー類比による認識へ

ラムスもデカルトも、共にスコラ哲学の権威と戦った。そのための言わば理論武装の一環として、論理学や弁証法の彫琢に注力したラムスとは対照的に、デカルトは、既知の事項を真実らしく話すことにしか役立たない論理学や弁証法をスコラ哲学の悪しき伝統の一つと見なし、これらを哲学ではなく修辞学と考え、自らの真理発見法から排除した。しかしラムスもデカルトも、ともに数学研究から多くの想を得ており、前者から後者への影響は断言できないにせよ、両者の方法上の共通点は認められる。

デカルトにとって真理はたしかに、弁証法家たちの連鎖からは抜け落ちるのかもしれない(AT X, 406, 3-4)。しかしデカルトが「純粹数学の要諦はただこの点にのみある」(AT X, 385, 3-4)と断言する方法の目的は、中項を測り求めて諸項を比例関係のもとに織り成し contextus (AT X, 383, 24)、それによって「すべての問題が確実な方法によって検証されるためにそこに還元されるべき、探究される事物の系列」(AT X, 383, 24-26)、つまり認識の連鎖を編むことにあった。なぜなら、「すべての学問は結びつき、相互に依存しあっている」(AT X, 361, 16-18)からである。ただ、デカルトの連鎖は説明や証明を念頭におく弁証法や論理学によるものではなく、あくまで数学研究に端を発した真理発見法による産物だった。

クラヴィウスによるエウクレイデス『原論』註釈書の序文は、数学の特殊な地位について述べた興味深い表現がある。数学は物質から独立した事物を扱うが、実際には物質中に沈潜している *immersus* がゆえに、「数学は形而上学と自然科学の中間 *medium* の位置を占めている」⁴⁷。デカルト自身のもとも見ても違和感を覚えないほど、クラヴィウスのこの考えは、青年デカルトの哲学とその方法の形成において、数学が果たした重要かつ独特な役割を的確に表しているように思われる。このような印象はおそらく、デカルトの青年時だけのものではなかった。哲学者の死をストックホルムで看取ったシャニュは、同地に建てたデカルトの記念碑の碑文に以下のように刻ましている。「(デカルトは) 自然の神秘を数学 *mathesis* の法則と比較対照し、それらの秘密を各々の同じ鍵で開けることを大胆にも望んだ」⁴⁸。その探究の基礎には形而上学があったことを、デカルトの友人シャニュはもちろん知っていた。

しかしながら、これまで見たようなデカルトの真理発見法は、『規則論』以後も同様に見受けられるのだろうか。じつはこの問題は、『規則論』以前と以後のデカルトの研究を方法的に分かつ基準の一つとなった。なぜなら、中項や共通項を介した知識の連結法は、『規則論』が一般化を試みたにも関わらず、その後再び数学分野に限定されるからである。その果実はもちろん『幾何学』に他ならず、その方法の端的な概念は第一巻の冒頭に、比例中項の発見方法と、同じ量を表すには図形と等式のどちらにも還元可能なこと、すなわち幾何学と代数学が連結できることが述べられている。諸項をそれらの共通項で結びつける方法は、『規則論』では、計量可能な図形や数を介した一般的な認識方法へと昇華が図られながらも、自然学と形而上学には適用しきれないことから、再び数学へとその使用が戻された。中項を見出すためには二項の関係を正確に測り、その中間を算出しなくてはならない。『規則論』で中項が尺度 *mensura* の概念と切り離せなかったのは、それがあくまで形や数、大きさなどの量に関わるからで、中項を見出すにはまず諸項の関係を測る *metior* 必要があった。

とはいえ、このような中項による認識の連結法は、量の計測に限定されない『規則論』以後の研究では、はたして完全に放棄されたのだろうか。論理学も数学も、デカルトは若年のころ「少し勉強した」(AT VI, 17, 11-15)と控えめに言っているが、ラ・フレーシュという当時のヨーロッパ最高の学府で優秀な学生だった少年デカルトの身に沁みついた方法は、成年デカルトの批判を乗り越え、その痕跡を残している可能性も大いにあろう。それ

⁴⁷ Clavius, *op. cit.*, I, Prolegomena, p. 5.

⁴⁸ AT XII, 590, 26-29.

は例えば、量を測り得ず、したがって中項を割り出すことのできない自然学や形而上学の事物の考察に際し、比較または類比を適用するという、少年デカルトが数学研究において培った方法に見出せるかもしれない。

アリストテレスは『分析論後書』で、類の異なるものを考察する際の類比（アナログア）の有用性を強調した上で、「類比によって同じ事柄は、中項に関しても類比によって同じ中項を持つ」⁴⁹と述べた。これはデカルトにおいても認められる考えである。既にデカルトは「第十二規則」で、物体の認識とその物体との間には類似点が無いことを指摘し、その関係はただ「類比によってのみ解されなければならない」（AT X, 415, 22-27）と言った。これはその後の自然学において、物体の認識はその意味によって（『世界論』第一章）、あるいは比較または比喩 *comparaison* によって（『屈折光学』第一講）なされなければならないとする方法論へ発展する。そしてこの方法は自然学だけではなく、形而上学の認識にも適用されることになる。

「第二答弁」は神が存在する原因を説明するため、神の本質を「類比 *analogia* によって作動因へ関係づけて」（AT VII, 240, 12-13）、その原因は神自身にあること（いわゆる神の自己原因）を説明している。このように、測り得ないもの、比例関係が判明に示されないものに対して、類比を用いて認識するのは、そこに共通の尺度がなく、中項が割り出せないために「単純かつ明白な比較」（AT X, 440, 10-11）ができない理由による。有限な精神の持ち主が神のような把握不可能な存在を考察するためには、理解し得る尺度を介した類比が不可欠である。「第二答弁」でデカルトが類比として用いたのは、辺を無際限に持つ多角形は円に見なし得るという幾何学上の例であり、このような所にも、デカルトにとって類比は数学を発祥とする方法である事実がよく表れている。なお、ここでデカルトが本質としての形相因を説明するための拠り所として、『分析論後書』に言及しているのは象徴的である（AT VII, 242, 16-17）。この書は中項と類比について詳述しており、デカルト自身はその点に触れてはいないが、類比の着想をそこから得て（批判的にせよ）それを援用する上で、アリストテレスは大いに役立ったと思われるからである。

けれども、たとえこのような影響の可能性が見られるからと言って、デカルトをアリストテレス主義者と言うことはできない。同様に、学問の連鎖や普遍数学などの概念、さらには中項を介して認識を結合する方法に類似点が認められるからと言って、デカルトをラムス主義者と見なすことはできないだろう。先人たちと共通の語や概念を用いる場合にせよ、スコラ学者と論争する際にスコラの語を使う場合にせよ、デカルトはただ、「既に昔からあって用法も認められている用語」（AT X, 378, 7-8）や概念を援用したにすぎない。その内容や用法はあくまで独自の、言うなれば「デカルト的」なもので、デカルトの哲学体系が独自であるだけ、そこに登場する語や概念の用法、そして方法論もまた独自のものとなる。デカルト自身が言及しない限り、他からの借用や影響関係は容易に見定めることはできまい。それは慎重に注意しなければ、多くの場合、推測の域を出ないことになるだろう。

⁴⁹ 『分析論後書』第二巻、第十七章 99a15-17.

参考資料

1. Regula XI : « ... [hæ duæ operationes (=intuitus mentis et enumeratio) se mutuo juvent et perficiant,] adeo ut in unam videantur coalescere, per motum quemdam cogitationis singula attente intuentis simul et ad alia transeuntis » (AT X, 408, 15-17).

1) éd. J.-L. Marion : « ... [le regard de l'esprit et le dénombrement se soutiennent et s'achèvement mutuellement,] jusqu'à sembler croître de pair en une seul(e), par un certain mouvement de la pensée qui regarde attentivement chaque [chose] et [tout] ensemble passe aux autres » (*Règles utiles et claires pour la direction de l'esprit en la recherche de la vérité*, La Haye, Martinus Nijhoff, 1977, p. 38).

2) éd. J.-M. Beyssade & D. Kambouchner : « ... [l'intuition de l'esprit et ; l'énumération s'aident et se complètent l'une l'autre,] jusqu'à donner l'impression qu'elles se fondent en une seule, par une sorte de mouvement de la pensée qui saisit attentivement chaque chose en même temps qu'elle passe à d'autres » (*Œuvres complètes*, I, Paris, Gallimard, 2016, p. 403).

- Le verbe *transeuntis*, génitif singulier du participe du présent de *transeo* « passer », se rapporte à *cogitationis*, génitif singulier du substantif de *cogitatio*, « [un certain mouvement] de la pensée ([*motum quemdam*] *cogitationis*) » qui passe aux autres. J.-L. Marion, malgré sa note 6, pp. 220-222 dans son éd., prend « [tout] ensemble » pour le sujet du verbe « passe », alors que *simul* « ensemble » est un adverbe (le mot « tout » n'existe pas dans l'expression de Descartes).

- Mais Marion remarque en même temps qu'« il s'agit d'un moyen terme entre deux opérations du seul entendement humain » (p. 222).

2. *Mathesis universalis*

- *Étude du bon sens*, éd. Vincent Carraud & Gilles Olivo, Paris, Puf, 2013, identifie avec la méthode de recherche de la vérité la *mathesis universalis*, qui n'est plus une généralisation des procédures mathématiques, mais une unité méta-mathématique de la science (à l'instar de J.-L. Marion).

- éd. J.-M. Beyssade & D. Kambouchner (F. de Buzon) distingue la *mathesis* de la méthode (de même que David Rabouin dans sa *Mathesis Universalis*)

3. *Studium bonæ mentis (Étude du bon sens)* : éd. Carraud & Olivo 1) restitue selon les indications de Baillet des textes d'autres provenances (Kambouchner : « pièce centrale... il vaut assurément la peine... mais il n'est pas certain qu'on puisse dépasser, ce faisant, le stade de la conjecture suggestive » (p. 241) ; 2) propose le destinataire de l'ouvrage, comme Guez de Balzac, homme des lettres et ami de Descartes, en qui on pourrait voir la figure possible de *Museus* ou de Musée (pp. 125-126. Kambouchner : 「二人の出会った日付が不明、バルザックの名前がバイエの伝記の当該箇所には皆無」, p.637).

4. éd. Carraud & Olivo : *Érudition : Studium bonæ mentis – Regulæ の流れ* ; le *Traité de l'érudition*, dont parle Descartes à Princesse Élisabeth, est les *Regulæ*.

5. La recherche de la vérité : date 1) hiver-printemps 1628 (G. Olivo) ; 2) hiver-printemps 1631 (V. Carraud). Avant ou après la doctrine de la création des vérités éternelles (1630) ?

= « un petit recueil de rêveries » (*lettre à Balzac*, 5 mai 1631, AT I, 204, 28)